

Doing より Being へ——ロレンスのポスト近代認識

古 我 正 和

I

最近人間の生き方として新しい考えが提起されている。妊娠中の胎児の精密な検査が可能となった場合、もしその胎児の先天性異常が発見された時にどういう処置をとるかということについてである。生まれる前に抹殺してしまうか、あるいは産んで一生共に苦しむか、或いはまた検査そのものをしないという意見もある。

進化論の適者生存という考えに従うと、生まれた後、他の人々と共にうまくやっていける者のみを生かせばいいということになるが、文明が進んで生活がし易くなるにつれて、生きていくことが可能なケースが増えてくる。国民皆年金の制度ができている今、老後の不安は以前に比べれば少なくなっている。

文明がすすんで人間の生き方が自由な立場から考えられるようになってくると、人間の生き方としてどのようなものが尊く、どのようなものが避けられねばならないのかが一概には言えなくなってきている。現在の子供に将来どのような人間になりたいかと尋ねると、自分のお父さんのような人になりたいとよく答えると言う。これは従来「偉い」と考えられてきた生き方が実はそうではなく、他人には見えない部分で人の模範とはどうしても言えないような、社会にとって負の役割しかない生き方となっているという事が、情報化の波の中で次第に明らかになってきているからである。その結果、今の若者にとって偉い人間とは何かというイメージが、昔のそれとは大いに違ってきているのである。

「英雄の時代」というのがあった。国が乱れて悪がはびこり、警察力ではどうしようもなかった時代である。このような時代には、英雄が出現していわば

力で国を統一した。このような時代には、人々はその英雄に憧れたのである。この体制は今でも世界の幾つかの国で残っているが、民主主義と情報が氾濫する中で、人々は英雄よりもむしろ国民に選ばれた「普通の人」に誠実な政治をやってほしいと思っている。

また以前は神様に頼っていた事を人間は自分の力で実現できるようになったこともあって、現在では神様が以前のように大きな力を持たなくなったり、或は神は死に絶えたとさえ言われることもあるが、その事と先に述べた英雄の退場とは、同じところから出ている。一般の人間が強くなったのである。

こうして近代になって、人間の一生に貴賤はないのだという考えが生まれ、先に述べた先天的身体障害という厳しい運命を背負った人間が、仲間たちの暖かい思いやりによって生きてゆくことも可能になってきたのである。そしてこのこと自体が人間の生なのだ、生きるということなのだという考えが出てきている。ここでは人間としてこの世に生を受けて、それを大切にしながら暮らすことそのことが、尊いことになるのである。

II

さてD.H. ロレンスは近代の最先端を行く悩み多いイギリスで、文明の腐敗と墮落を前にした作家だった。『恋する女たち』(Women in love, 1920)には、この悩みが惨みでている。この作品の中で、登場人物の一人で主人公のパーキン (Birkin) は文明の腐敗と墮落を述べて、人間はどこかで何かをしなければならないのに、生活は混乱していてどうしていいか分からないという。これに対して恋人のアーシュラ (Ursula) は、Why should you always be *doing*?⁽¹⁾ と尋ねて、何か目覚ましい事をしようという考えは卑賤なものであり、そういったヴィクトリア時代の新興中産階級のがむしゃらな生き方よりもむしろ、真の意味で貴族的な、野に咲く花のような在り方の方がはるかに良いと、次のように言う。

I think it is much better to be really patrician, and to do nothing but just

(2)

be oneself, like a walking flower.

またバーキンは人間はもう墮落してしまっていて「花を咲かせる」ことはないが、自然の草花は新しい創造の象徴だと述べ、現代の人間たちは、かつて地球に生存し今では滅び去った海の怪獣、魚竜と同様、自信を失って地球上で這いつくばり、もう地球の支配者になることができないからその地位から退場して行き、それに代わってヒアシンスやニワトコや動物たちが地球の支配者となっていくという。⁽³⁾

今まで述べた doing, do, be, それに flower, ヒアシンス, ニワトコなどに注意して欲しい。上の文を何気なく読んでいれば非常に謎めいた感じがする。とりわけ do や be, それに flower などは、何かを象徴しているような感じがする。ロレンスの作品の中に出てくる草花や動物が、これで大きな意味を持つことが分かる。ロレンスはしばしば草花を作品の中で描写するが、これは上の観点から解釈することができる。すなわちもうその主たる役割を終えてこの地球上から退場するしかない人間に代わって、草花が不死鳥のように登場するという考えである。草花が地球上の新しい創造の象徴となっている。

さらに花に関する記述を加えると、人間は人生において花を咲かせることができないばかりか、実際には蕾さえもつけず、アブラ虫がついて腐ってしまうとバーキンはいうのである。そして次のように言う。

“And why is it,” ... “that there is no flowering, no dignity of human life now?”

“The whole idea is dead. Humanity itself is dry-rotten, really. There are myriads of human beings hanging on the bush – and they look very nice and rosy, your healthy young men and women. But they are apples of Sodom, as a matter of fact, Dead Sea Fruit, gall-apples...”⁽⁴⁾

ここで flowering は人間の尊厳 (dignity of human life) と同じものとして扱われていることが分かる。そしてこのように開花しないのはあのソドムに生えるリンゴのように人間はその骨の髄まで腐っていて、古い伝統にしがみついてい

るからだと言はるは言うのである。

Being と Doing, それに花をめぐるいきさつを見てきたが、ロレンスはそのエッセイの中で、ものの在り方として Being と Doing の二つを論じている。⁽⁵⁾ 彼はその中で Being の例として、真っ赤に燃えるように咲く芥子はそのように真っ赤な状態で存在することそれ自体に意味があるのであり、これこそは Being の状態だと言っている。そして英雄的行為やその他の人間が生きていくためにおこなう多くの事柄、職業としての仕事、世俗的義務など、われわれの日常生活の大半の事柄を Doing と呼んでいる。

すなわちさきほど考えたように、この世に生を受けた意味をかみしめ、それを大切にしながら生きていくという、地味で静かな在り方が Being である。そしてそれと対照的にもっと積極的に新しいものを開拓し冒険していこうとする在り方を Doing と言っている。

ロレンスは近代を突き進んできたイギリス人の在り方が Doing であり、ヴィクトリア時代を経て20世紀に入った時の彼らの状態が、先に見たように、腐敗し墮落しきったものであった事を発見するのである。上に見た『恋する女たち』のバーキンは、この事を言っていたのであった。

そしてさらに詳しく見てみると、もっと複雑なものが付きまとっている。先の芥子のたとえをもう少し詳しくみてみると、人間の在るべき理想は、他人の幸福を奪わず余分な蓄えをせず、芥子と同様に花を咲かせることだという。そしてそれを具体的に次のように述べている。

...he (=poppy) lifts his head, slowly, subtly, tense in an ecstasy of fear overwhelmed by joy, submits to the issuing of his flame and his fire, and there it hangs at the brink of the void, scarlet and radiant for a little while, immanent on the unknown, a signal, an outpost, an advance-guard, a forlorn, splendid flag quivering from the brink of the unfathomed void, into which it flutters silently, satisfied...⁽⁶⁾

すなわち、芥子は虚空の境涯に自分の火を漂わせ、いまだ未知なるものの内に内在し、生きる上での前哨基地の旗を、底知れぬ虚空の境涯から靡かせるとい

うのである。そしてこの時過去にはなかったものが存在することになるという。ここには東洋的、あるいは日本古典の無常観に似たものが見られる。

人間も同じで、自己保存の目的はただ、存在と非存在の境界——戦線 (firing-line) へと、途中納屋にも蓄えにも見向きもせず一目散に向かい、最後に生の頂点で自己の旗を高く掲げる事だと次のようにいう。

What is the aim of self-preservation, but to carry us right out to the firing-line; there, what *is* is in contact with what is not. ... I go to fight for myself. Every step I move forward into being brings a newer, juster proportion into the world, give me less need of storehouse and barn, allows me to leave all, and to take what I want by the way, sure that it will always be there; allows me in the end to fly the flag of myself, at the extreme tip of life.⁽⁷⁾

上の自己保存 (self-preservation) という言葉は意味深い。ここには人間を他の動物と同じレベルにまで一旦下ろし、そこから出直すという20世紀のモダニズムがある。また存在と非存在の境界といえば、ロレンスが遍歴した場所は大抵そういう所であったことが分かる。たとえば『カンガルー』で描かれた灌木の藪にしても、アメリカのニューメキシコの先住民の住む荒涼とした荒地にしてもそうである。またその生き方が壮絶な一面があったことや、その死にいたるまでのロレンスの生き様を考えると、まさに「最後に生の頂点で自己の旗を高く掲げる」という生き方に相応しいものが感じられるのである。

また別の言い方をすれば、未知なる海の岸辺へ来た時、潔く飛び込み進んで行く事こそ芥子の開花と同じで、余生には未知の海の冒険がある。もし飛び込めないと、後は腐った安全の中でうごめき、自分より暮らし向きの悪い人々を哀れんで涙するが、自分はその哀れみの対象である事を知らぬままに終わるとい⁽⁸⁾う。

III

H.M. ダレスキーはこのことをロレンスの生いたちに当てはめ、対照的な性格の両親の間で彼が傾いていったものは、近代的教養を身につけた母親の男性的性格である Doing ではなく、父親の持っていた女性的要素である Being だったと次のように言う。

...there is little doubt that Lawrence's sympathies are with the qualities ranged under the female. Although his effort is to reconcile the two principles, his stress is on the value of the female, on 'being', not 'doing'...⁽⁹⁾

また人間にとって真に重要なもの、人生において意味のあるのは Being であり、人間の究極の目的は「花」だという。花は今考えてきた Being と一連のものである事は確かであり、花が何か特別の内容で用いられているが、ロレンスが歌った詩の中に、これのヒントが見られる。アーモンドの木は復活の象徴で「花の核心」(heart of blossom)⁽¹⁰⁾ であるとロレンスは言っている。ここにも、「花」に対する特別な意味がうかがわれる。

さて上の Being が女性的で、Doing が男性的という表現は、ともすれば女性と男性の単なる感覚的な容態からくるもののように思われがちであるが、女性はその胎内に子孫を宿し育てるという生物学的機能の他に、あるいはそれ故、最近遺伝子学的にもその意味が見直されてきている。

遺伝子学によれば、人間は二十三対の染色体を持っていて、そのうち二十二対までは XX の組み合わせである。そして最後の一对が XX であれば女性となり XY であれば男性となる。この Y なる染色体は X にくらべて非常にサイズが小さく、中に含んでいる遺伝子の数も少ない。X はその逆でしかも免疫や血液凝固、色覚などに役立つ遺伝子がぎっしりと詰まっている。Y 染色体の役割は個体を女から男に作り替えることだけである。そこで人間はもともと女になるように設計されていて、Y 染色体のおかげで無理矢理男にさせられているとさえ言えるという。

そこで多田富雄氏は「人間にとって女として存在することは状態であるが、男として存在することは現象である⁽¹¹⁾」というのである。この状態と現象はまさにロレンスの Being と Doing とに読み替えることができる。ロレンスが一世紀近くも前に言ったことは、現代の遺伝子学によって証明されるのである。

ところで、ニュー・メキシコでロレンスは先住民の娯楽を体験するが、その中で彼は Being を見だし、彼らの「在る」べき姿そのものの重要性を次のように述べている。

Everything is very soft, subtle, delicate. There is none of the hardness of representation. They are not representing something, not even playing. It is a soft, subtle *being* something.⁽¹²⁾

doing something ではなくて being something なのである。ここにはっきりとこの概念がみられる。もう一度言えば、上で考えた、この世に生を受けた意味をかみしめ、それを大切にしながら生きていくという在り方が Being であり、それと対照的にもっと積極的に新しいものを開拓していこうとする精神が Doing である。

ロレンスは遠く離れたニュー・メキシコの地に、自分の母国ではもう見ることができない在り方 Being を見いだしたのであった。ロレンスの文学をさらに読んでいくと、Being は上に見たニュー・メキシコだけではなく、彼が通過して行ったイタリアやオーストラリア、メキシコなどに、藪 (Bush) や闇 (Darkness) として描写されている。そしてこれこそが、別の言い方をすれば、彼が「過去の永遠」と呼んでいるものだと考えられる。

IV

さてここに、この考え方にたって見てみるとすっきりわかる一つの映画がある。小栗康平監督の「眠る男」という作品で、これは競争と業績に基づく生き方ではなくて、生きて存在していることそれ自体が価値あるものだという考えに立って、自然そのものを自分と同じ生命を持つものとして映し出している。

だから登場人物たちは、何か目覚ましい特別なことはしない。まさにロレンスのいう Being の生き方である。

あらすじは簡単である。崖から落ちたある男が意識不明になってずっと眠り続ける。その間彼に語りかけるものは自然だけである。言葉の代わりに風景と沈黙が支配している。この点でもロレンスの言葉に対する考え方と同じである。彼が死んだ後、能「松風」が演じられる。夢幻能では、現世と死者の世界との交流があるが、その中で死者の霊の呼びかけに誘われて、東南アジア出身のティアという人物が森へ行き、死んだ男の霊に出会う。そして個人は死ぬけれども生命の営みは連続し再生する、その象徴として、その時まで枯れていた井戸がまた湧きだし、ティアはその水で沐浴する。新しい生の始まりの象徴である。人間も自然も共に「ある」(Being) ことを確認することによって、しかも広くアジア地域の人々の心とも通じ合う精神が見られるのである。まさにロレンスの思想を地でいっている作品である。

まさに将来なりたいと思う理想像として、子供たちによってあげられた凡人としての父親は、歴史に名を残すような偉い人物ではない平凡な存在であり、まさに Being であるといえる。

過去の歴史を考える時、このようないわゆる凡人が大半を占めている。そして残りのわずかがいわゆる「偉い」存在で Doing ということになるが、この場合も歴史を見てみると必ずしも本当の意味で偉いとはならず、長い目で見た場合人類にマイナスにしかならないものが相当ある。

ロレンスも同様に、Doing についてはあまり大きな意義を認めていないことが分かる。彼はつい身近にでも見られる「慈善行為」の中にすら、売名的な偽善を指摘している。公共の利益の名においていかに売名的な行為があるかは、今のわれわれの身の回りにでもいくらか見いだすことができる。このように考えると、前の「眠る男」という作品はまさにロレンスやフランスの歴史家アラン・コルバン (Alain Corbin)⁽¹³⁾ の思想を映し出している作品と言える。

さて「生きる」ということを考えた場合、英雄の時代が過ぎ普通の人間が神様の能力をももて得てきて個人の一人一人が尊い存在となってきている現在、今考えた Doing よりも Being の方が大半の人間にとって重要なことであること

は明らかであろう。

V

以上、Being と Doing について考えてきたが、ロレンスが他の言い方で述べていることで、これと良く似たものがあるが、本論で考察した Being と Doing はその最終的帰結のように思われる。その一つに肉と霊があるが、Being は肉の系統をひくものであり、Doing は霊の系統から出たものだと考えることができる。これはヨーロッパの歴史を見、またロレンスの思想をたどってみると納得がいくのである。さらに霊が人間の知性活動から出たものであるとするならば、「言葉」もまた同じ領域に属するものであり、『翼ある蛇』(*The Plumed Serpent*, 1926) の登場人物ドン・ラモン (Don Ramon) が、言葉が観念や知性とと同じく文明社会の産物であると述べているのも、この Doing と一連のもの⁽¹⁴⁾のことを言っていると考えられる。

さらに言葉から一歩進んで、『アメリカ古典文学研究』(*Studies in Classic American Literature*, 1923) では、ものごとを知ることと存在することとの対立として扱われている。ここではアメリカのデイナ (Richard Henry Dana, 1815-82) はその航海記『水夫暮らしの二年間』(*Two Years Before the Mast*, 1840) の中で、海との裸の戦いの体験を通してそれを描いている。ギリシャの哲人の言った「汝自身を知れ」とは、自己の血の中を流れている大地と海とを知れということだと言う。ところが知るという場合、ものごとを知ること (knowing) と存在すること (being) とは相反する対立的状態であり、ものごとを知れば知るほど、それだけ生きることが少なくなり、よく生きれば生きるほど、それだけ物事を知ることが少なくなっていくと言うのである。これは血の自己と神経・頭脳の自己 (The blood self, and the nerve-brain self) の二元的対立であり、人間に課せられた十字架である。従ってギリシャの名言に従って物事を知れば知るほど、生きている状態から徐々に死の状態に近づいていく事になり、人間は知と生との間を揺れながら、究極的には「どうすれば知らないようになるか」ということを知っていくという。デイナは海を知ること

によって、彼自身は生きている状態から崩壊していき、「物知り」とはなったけれども人間味の薄れた機械に近い存在になった。しかしデイナは海を体験し知ることによって、上の「どうすれば知らないようになる」かということを知っていくのである。それは彼が死に向かって踏み込み、意識の大冒険、意識の大崩壊、意識の未知の境地へと突き進む事である。つまり人間が今まで体験したこともないような、神秘を探るのである。これをはるか彼方の水平線に浮かぶ一羽のあほう鳥に見たデイナを、ロレンスは次のように描いている。

He sees the last light-loving incarnation of life exposed upon the eternal waters: a speck, solitary upon the verge of the two naked principles, aerial and watery.⁽¹⁵⁾

普通の水夫はこのような「意識」化することをせず、あざらしや他の動物のように単なる宇宙の構成要素となるにすぎない。「意識」化とはこのようなことを意味し、ここがデイナと普通の水夫との違いなのだ。そしてこの意識化こそは、人間が人間たる所以のもので、十字架そのものだとロレンスは次のように言う。

For the sea must be mastered by the human consciousness, in the great fight of the human soul for mastery over life and death, in KNOWLEDGE. It is the last bitter necessity of the Tree. The Cross.⁽¹⁶⁾

すなわちこの KNOWLEDGE には人間の物事の意識化、すなわち Being とは逆のものがある。ここには Being と Knowing の二元的対立があり、Knowing は本論で考えている Doing の領域だということができる。

そしてロレンスの自伝小説『息子たち、恋人たち』(Sons and Lovers, 1913)の中に見られるように、その分身たるポールが Doing 的な母親の影響から脱して、後に他の作品に至って徐々に Being の象徴たる父親の方向へ移っていったことを考えると、ロレンスの一生は近代の根底をなしている Doing の認識から始まって、言わば近代の後に来る新しい在り方としての Being の発見とそれの実践であったということができる。

近代は人間が知性に目覚め、その時期までの Being の状態から解放されて、言わば人間的欲望のままに Doing を無限に追及する連続だったということができる。そしてイギリスの発展のいわば最終的な段階であるヴィクトリア時代を経た20世紀の初め、ロレンスはその行き過ぎに気づいて新しい生き方を提起したのである。そして21世紀に入った今、この地球上のあらゆる生き物の間の共生が叫ばれる中で、新しい倫理観の基礎となる Being の意味が問い直されている⁽¹⁷⁾。

筆者は今まで機会をとらえては、ロレンスがそのエッセイや詩、小説の中で述べてきた光と闇やその他の二元的対立を考察してきたが、Being と Doing はその終極的なものであるように思われる。

注

- (1),(2) D. H. Lawrence. *Women in Love*. eds. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen, Cambridge: Cambridge UP, 1986, p.125.
- (3) Cf. *ibid.*, p.128. cf. M. Koga. "IMPERSONALITY in D. H. Lawrence II", *Circles*, vol.4, 2001, p.25.
- (4) *Women in Love*. *op. cit.*, p.126.
- (5) Cf. M. Koga. "Lawrence's Celtic Experience—His Yearning for Mediaevalism". *Circles*, Vol.5, 2002, p.48.
- (6),(7) Cf. D. H. Lawrence, *Phoenix*. ed. Edward D. McDonald, London: Heinemann, 1961, p.409.
- (8) *Ibid.*, pp.409-410.
- (9) H. M. Daleski: *The Forked Flame*. Faber & Faber, 1965, p.35. Cf. M. Koga. "Animism in D. H. Lawrence". *REVIEW OF ENGLISH LITERATURE*, Department of English Literature, Faculty of Letters, Bukkyo U., Vol.10, 2000, p.22.
- (10) Cf. D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence, I*. eds. Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts, London: Heinemann, 1972, pp.304-305.
- (11) Cf. Tomio Tada. 'When the Operation for the Change of Sex Has Been Admitted', in the evening edition of *the Mainichi* on the third of June in 1998.
- (12) D. H. Lawrence. *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Harmondsworth: Penguin, 1981, p.60.
- (13) Cf. M. Koga. "IMPERSONALITY in D. H. Lawrence I". *Journal of the Faculty of Letters*, The Faculty of Letters, Bukkyo U., Vol.85, 2001, p.111.

- (14) Cf. M. Koga. *A Study of Lawrence—Beyond the Western Civilization—*. Osaka Kyoiku Tosho, 1996, pp.73-74.
- (15) , (16) D. H. Lawrence. *Studies in Classic American Literature*. Heinemann, 1964, p.108.
- (17) Cf. Toshitaka Hidaka 'Consideration of the New Century, Part II, The Loose Human Bondage, 2', in the evening edition of *the Mainichi* on the 23rd of March in 2001.